TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY
ISSN 0385-7506
Bulletin of the Tohoku University Library
KIBOKO
東北大学附属図書館報 木這子 Vol.47,No.2 suppl. 附属図書館創立１１１周年記念特別号 別冊

TALK SESSION 学生×若手の図書館職員による座談会 「図書館の今とこれから」

2022年8月24日、学生と若手の図書館職員による座談会を開催し、図書館の今と未来について考えました。学生のお二人は、2022年3月16日に発生した福島県沖地震により被害を受けた附属図書館の復旧作業に、ボランティアとして協力してくださったSCRUMという団体に所属されています。
「木這子」附属図書館創立111周年記念特別号では、誌面の関係で抜粋して紹介しましたが、ここではフルバージョンをお読みいただけます。

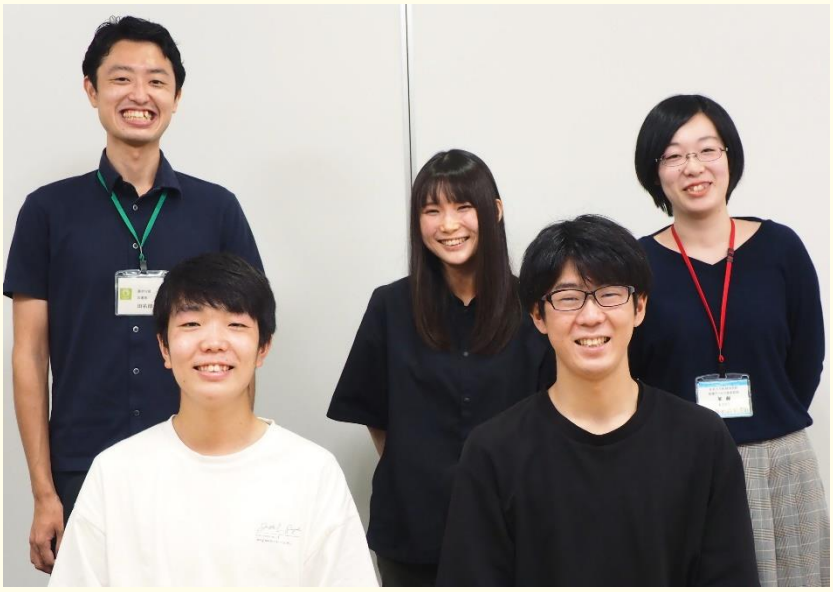
加藤 早速自己紹介から始めましょう。本館閲覧係の加藤です。貸出返却などのカウンター業務や、施設の管理、ガイダンスの実施など、利用者サービスを担当しています。一番利用者のみなさんと関わる仕事なので、図書館を気持ちよく使ってもらえるよう、日々心がけています。本日はどうぞよろしくお願いします。

阿部 工学分館整理・運用係の阿部です。普段は、加藤さんと同じくカウンター業務も担当しているんですが、そのほか参考調査といって、利用者の方が資料を入手するために必要な、この本はどの図書館にあるか、この論文はどの雑誌に載ってるかといった、入手する前段階の調査や、電子ブックの登録業務をしています。

田名部 農学分館図書係の田名部です。主に雑誌に関する業務を担当しています。具体的には国内雑誌の購入契約だったり、納品後に利用できるようにいろいろと整備しています。農学分館は職員6人で回しているので、カウンター業務もしますし、参考調査も含めもろもろ担当しています。

髙橋 経済学部経営学科3年の髙橋です。ゼミではNPOに関することを勉強しています。サークルは井指と同じくSCRUMに入っていて、3年生なのであまり活動には関わらないんですが、後輩がよりよく団体運営できるようなサポートなどをしています。

井指 農学部2年の井指です。サークルは髙橋さん同様SCRUMで、代表をしています。SCRUMでは特に緊急災害支援をやろうと考えていて、今までコロナ禍でなかなかできていなかった活動をもう一度復活させようと、災害が起こった時すぐに行動できるような仕組みづくりを目標に活動しています。その一環としての図書館ボランティアでした。



▲前列左よりSCRUMの井指晴貴さん(農学部2年)、髙橋真二郎さん(経済 学部3年)、後列左より田名部晃平(農学分館)、阿部立夏子(工学分館)、加藤舞(本館)

加藤 ありがとうございます。今、ボランティアの話にも触れていただきましたが、あらためて学生のお二人に図書館でボランティアをやろうと思ったきっかけについて伺いたいと思います。

髙橋 端的に言うと、いつもお世話になってるから恩返しっていうのが本当に素直な気持ちです。ボランティアは実際やってみたいと思ってたんですけど、僕の代はコロナ禍で団体としてはなかなか動けなくて、だからSCRUMで初めて団体としてボランティアできる機会でもあったので、やってみたいなって。特に図書館はいつもお世話になっていて、頻繁に利用してるので、自分たちで何かできないかなと思ったし、本当にあの時の地震は揺れが大きくて、そのとき僕は石巻にいたので津波の警戒注意報も出たりして、これ結構やばいんだなって、なんとか力になれればなって思ってました。

田名部 髙橋さんの出身はどちらですか？

髙橋 群馬県出身です。東日本大震災の時は群馬にいて、それほど大きな被害はなかったので、初めて経験した大地震でした。

井指 僕も大体同じような理由で、図書館は常に利用していましたし、何か大変なことが起きてるっていうのは大隅館長のSNSを拝見して知っていたので、何か動けないかなって考えてて、ちょうど別の方とお話ししている時に話題になったので、春休みだしせっかくなら、ちょっとやってみようかと始めました。

加藤 その節は本当に助かりました。

田名部 SCRUMってどういう団体なのか、もうちょっと詳しく聞かせていただけますか？

井指 SCRUMは、大学の組織である課外・ボランティア活動支援センターの支援スタッフという枠組みでありつつ、基本は大学の他のサークルと同じようなことをやってます。東日本大震災をきっかけに設立された団体なので、具体的な活動内容は、例えば緊急災害支援とか、震災の伝承活動みたいなところが一番わかりやすいかなと。そこから派生して、防災についての情報発信とか、東北の魅力発信とか、ボランティア学生と現地とを結びつけるようなことを主にやっています。

田名部 井指さんは宮城県出身ですか？

井指 僕は東京出身です。

阿部 SCRUMって、皆さんのように東北外から来て、東北地域の復興を支援してくださってる方が多いんですか？　それとも地元の方のほうが多いんですか？

井指 地元出身のほうが少ないですね。もちろん、岩手出身も福島出身もいましたし、同期には東日本大震災で自分が被災した経験が動機となってボランティアをやっている方もいますけど、東北外のメンバーが多いですね。

阿部 地元や出身に関わらず、東北地域の復興のため活動してくださってるということがありがたいですね。

田名部 皆さんどういうきっかけで、ボランティアサークルに入るのでしょうか？

井指 一番は、東北大学に来たからには東日本大震災について知りたいと思う方が多いのと、せっかくならボランティアをやってみたいっていう学生と、大きく二分される気がします。

田名部 井指さんはどっちでした？

井指 僕は、どちらかというと後者でした。大学は自由でいろんな人がいるというイメージがあったので、普段の生活を超えたような方々と出会えるボランティアをやってみたいなと思い始めました。

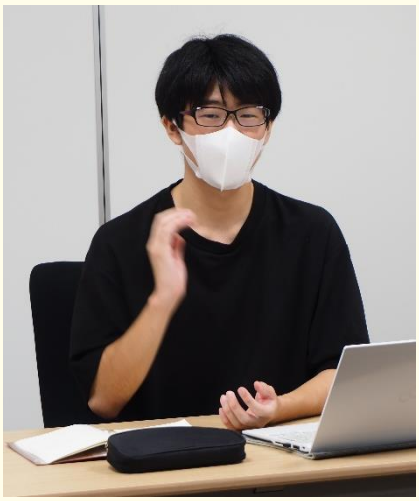
高橋 僕も高校生までは勉強と部活という世界しかなかったので、新しいことにチャレンジしてみたいなと思い、サークルをいくつか見て回ったんですけど、コロナ禍でも比較的活動しているのがボランティア団体だと思ったので、そこを中心に見たって感じですね。そこから、課外・ボランティア活動支援センターの松原先生であったり、いろんな人と出会って、ボランティアってなんか楽しいなと思い続けてきました。

加藤 しっかり考えられててすごいですね。皆さん動機はさまざまでしょうけど、支援していただけるのは大変嬉しいですね。

図書館がある日常

加藤 普段はどういうときに図書館に来るんですか？

高橋 主に二つかな。レポートなどの参考資料のためというのが一つと、あとはオンライン授業を受けるために図書館の場所を利用してます。自分は、一つのことを自分なりに深めていくのが好きなので、一つのレポート課題があったら、とりあえず本を3冊読んでみるんです。ただ、その都度本を購入するとすごいお金がかかるんですよね。その点、ここの図書館はいい図書もあるし、先生方が紹介する参考図書もあるのでよく利用しています。あと、二つ目のオンライン環境に関して言うと、 実は僕、3年間ほぼオンライン授業だったんですよね。



一同 3年間……！？

高橋 はい。3年間、今までほとんどオンライン授業で、対面授業は本当に片手で数えられる程度しかなかったんですが、家でオンライン受けてるのが僕は正直しんどかったので、ちょっと外に出て受けてみたいなって。そのときに、図書館はグローバル学習室とか話せるスペースがあるし、最近は留学生も来るようになって、いろんな言語も聞こえるようになってきたので、 本当に楽しく勉強できる場所だと思いながら利用しています。

田名部 やっぱり話せる場所があった方がいいんですか？

高橋 そうですね、教室だと結構お喋りしている人もいますし、最近は対面授業も多くなってきて場所が少なくなってきたので、図書館はちょうどいい。

田名部 グローバル学習室で周りの人が話してるのは気にならないんですか？

高橋 ある程度距離が離れてて、マイクが周りの音を拾わないので気にならないです。教室だとちょっと狭くて、端にいても音を拾っちゃうので。

田名部 それなりに広い場所で、周りがざわざわ話してるようなところがいいんですね。

高橋 あとは、毎回教室を探さなくていいというのが大きいです。教室だと、月曜日のこの時間、今週は空いてたけど、来週は空いてないってことが頻繁にあるので。 やっぱりいつも使える場所っていうのは、大きな魅力かなって思います。

井指 僕はテスト勉強が多いですね。基本、家では勉強しないし課題もやらないタイプの人間なので、そのスイッチを入れ替えるっていう意味での図書館かなと。もちろん、参考資料としてレポートに図書館の本を使ったりすることもありますけど。青葉山新キャンパスにあるラーニングコモンズでホワイトボードを使ってミーティングをやることもありますね。せっかく対面で集まったのにPCカタカタだけだと、PCと話してるみたいな感覚になるんですけど、ホワイトボードがあるとちょっと前を向けるので結構使います。

加藤 皆さんご自身の目的に合わせて色々な使い方をしているんですね。自分なりの図書館活用法はありますか？

井指 僕は、本館の本棚の横に展示してある本は結構手に取るんです。大学に入って専門分野が絞り込まれる中で、他の分野もちょっとかじったりできるのが、あれのいいところだと思って。基礎ゼミに近いようなニュアンスを持っていると思うので、昨日はあの本、今日はこの本みたいな感じで触れてみるのも面白いのかなって。

加藤 書架横の展示本は私もよく選んで置いているので、すごく嬉しいですね。私は、本館の場合、今話に出た書架横の展示だけでなく、他にもメインフロアとかいろんな場所でミニ展示を行っているので、新しい本と出会う機会、本との接点が多いのがいいところだなと。

田名部 農学分館は、さっき話に出たラーニングコモンズ、あそこは公園だと思ってて。

みんなが簡単にコミュニケーションを取れる場所、それぞれが何やってもいい場所があるのはいいことだなと。学生がオンライン授業受けてもいいし、先生たちがミーティングしてもいいし、1人で勉強するためにホワイトボードを使ってもいい。そのラーニングコモンズが結構学生に使われてるって聞けてすごく嬉しい。本当はもうちょっと職員も介入したいんですけど、介入するとつまんなくなるような気もしていて。

髙橋 介入って具体的に何を指してるんですか？

田名部 例えば図書館が企画してイベントをやるとか。あと、これは実際にやってることですけど、情報検索の授業の一環で使うとか。ギリギリやっても、そういうレベルかなって。職員が常駐して何でも聞ける状態にしてもいいのかなとか思ってたんですけど、どれだけ需要があるのかも分からないし、ただ座ってるだけになりそうだなとか思ったり。

阿部 工学分館は、オンライン授業向きのスペースが多くて、Language Studioっていう施設には19のブースがあるんですね。思い立った時にぱっと自分専用のパーソナルスペースが確保できるっていうのが、魅力の一つかなと。あとウェブサイトが結構充実していて、工学部生向けに専攻別におすすめのデータベースを紹介してるページがあったり、チャットで質問ができるレファレンス機能があったりするので、知っていただけたら嬉しい。

田名部 自分が所属してるところ以外の図書館って行く機会ありますか？

井指 ないですねぇ。

阿部 立地的にも、微妙に生活圏から外れるじゃないですか。行きづらいところもあるのかもしれない。行ってみたら、もしかしたら普段使ってる館よりも、居心地がいいとか、自分に合ってるってことはあるかもしれないですね。

未来の図書館について

加藤 未来の話になりますが、図書館にあったら嬉しい施設やサービスはありますか？ 私は仮眠室とかトレーニングルームとかあったらいいなあって。

一同 ああ～（笑）

加藤 仮眠室は、自分が学生の頃勉強で疲れたときに「昼寝したいなぁ。仮眠室あったらいいのになぁ」って思ってたので。

田名部 研究室入ってからは、研究室で仮眠取れたりするんですけどね。

加藤 ほかに学内で安心して寝られる場所ってないですよね。トレーニングルームも、私は別にジムに行ったりするタイプじゃないんですけど、当時勉強してて、「肩凝ったなぁ」とか、レポートやってて「煮詰まってきたなぁ」みたいなことがあったので、気分転換に体をほぐしたりできたらいいなって。もうこれは完全に夢の話ですけど。

井指 僕はよくYouTubeで見る書評動画とかもいいかなって。本が分厚ければ分厚いほど、手に取るハードルは高い気がしますし、どういう本なのかすぐにはわからない。タイトルしかわからない状況で、手に取るかっていうとちょっと。それが動画なりラジオなりにしてもらえると見たり聞いたりするかなって。

田名部 図書館でYouTubeのチャンネルを持ってるから、Vtuber作って紹介者を変えつつやったら面白いかもしれない。

髙橋 確かに書評っていうのはいいな。読んだ本のアウトプットってレポートぐらいしか機会がないことが多いけど、レポートで書けないことも結構ある。あと、図書館の本って、本にメモを取るとか線を引くとかできないですよね。だから、何かしら書き残すツールが欲しいな。それがシェアできたりしたら、ああその本でこういうこともわかるんだみたいな、簡単なタグみたいなものになるかなって。

田名部 レビュー機能ってことですね。

加藤 ブクログとか使えないですかね。北青葉山分館、工学分館、農学分館でもやってますけど。

田名部 学生からの投稿を受け付けて、職員でチェックした上で掲載みたいなのはできそうですね。思いのほか実用的な案が出てきましたね。

阿部 コロナ禍では難しいかもしれないけど、アウトプットっていう意味ではラーニングコモンズに集まって、自分の好きな本について語るとか、1冊をみんなで読み解いてみるとか、そういうのをもっとカジュアルな形で細々とでもやれる機会があれば楽しそうですね。

田名部 ちなみに、学生さんはブクログって見ます？

井指 あんまり見ないですね。

髙橋 noteで書評を公開している人がいるので、最近はそれを見たりしてますね。

田名部 noteを使うときはハッシュタグで検索してます？ それともブラウザで検索してヒットしたものを読んでますか？

髙橋 人づてにこの人面白いとか聞いたものを読んでます。

田名部 なるほど、人で選んでるんですね。ほかに本を選ぶ際に見るものってありますか？ noteが多い？

髙橋 僕はnoteか本の帯ですね。

井指 僕はさっき言ったYouTubeチャンネルが一番多いですね。ある方が本を紹介してくれて、面白いなって思ったら手に取る。自分で本を探しに行くときは、小説の場合、裏面のあらすじを見ます。最近文字ベースの長文を見るのが億劫になってきちゃってて。

加藤 お話を聞いていて思い出したんですが、最近図書館で導入した、書籍のダイジェストを紹介してくれるSERENDIPっていうサービスはご存じですか？ 本の内容を要約して掲載しているサービスなんですけど、もしかしたらそういう、長文を見るのが億劫という方のニーズにぴったりかもしれない。今は図書館ウェブサイトのトップページ、お知らせの下にバナーがあるので、ぜひ見てください。ざっと内容を知る分には便利なので、こういうものも上手く使ってもらえると良いと思います。

田名部 最近は、最初に内容を三行くらいで説明してくれている記事も多くて、要約のようなサービスは結構ありだと思いますね。

阿部 私は、図書館で読んだ本について投稿するときのハッシュタグを決めておいて、Twitterでつぶやいてもらったものを、図書館のアカウントとして収集してまとめると、学内の誰かが読んだツイートを遡れたりして、面白いかなと思いました。ツイートをまとめるmin.tっていう、Togetterの簡略版みたいなサービスがあって、最近工学分館でそれを活用した企画をやったんですけど、そういうものも活用したい。

話はSNSへ

田名部 皆さんTwitterは、やってます？
髙橋 僕は全然やらないです。なんかあることないことありそうなイメージでちょっと……。
田名部 私も、本のタイトルとか商品レビューとか、ざっと調べたくて検索することがあるんですけど、アフィリエイト系のものが多かったりすることもあって、最近はTwitterでの検索はあんまりしなくなりましたね。
加藤 速報性っていう意味では結構良いと思うんですけど、中身の信憑性はちょっと吟味しないといけないですよね。
阿部 10年後、50年後、Twitterを使ってる人はいるのかなって、ちょっと気になりますね。今、図書館でも電子ブックの広報とか情報発信で使ってますけど、それが果たして生き残れるのか。生き残れなくなったとき、アーカイブとして残す価値とかあるのか。
加藤 10年後ぐらいであればまだ残ってるかもしれないけど、50年後、100年後ってなると、分からないですよね。どんなサービスについても言えることですけど。例えば、Facebookは一時期すごく盛り上がったけど、今の学生さんはあんまり使ってないのかなと思ってるんですが、いかがでしょうか？

井指 たまに社会人の方とやり取りするときに使ったりしますね。メッセンジャーとか。
髙橋 逆に僕は使っちゃいますね。Instagramだと、なんかキラキラしてて……。
一同（笑）
阿部 分かります分かります。
髙橋 Facebookだと、情報の質が高いっていうか、社会人の方と実名で繋がれるので、感度の高い情報が得られたりするので、僕はFacebook好きです。
田名部 実名だと変なこと書けないですしね。

図書館の情報発信

加藤 図書館側がどんなツールで宣伝すれば、学生の皆さんに情報を届けられるでしょうか？
井指 あらためて聞かれると困りますね、そもそもあんまりSNSを使わないので。一般的な学生が何で情報をキャッチしてるのかって言われると、どこなんだろう……。僕が大学に入った時は、大学のサークル情報とかをキャッチするためにTwitterを始めました。なので、少なくとも新入生にフォーカスするのであれば、Twitterかなって思います。そこからは、ちょっと分からないですね。
髙橋 僕が新入生の時も、Twitterは情報が速いイメージがあったので、手早く簡単に使いたいときはTwitter。あとは口コミとか人から聞いた情報が一番多かったです。SNSはプライベートっていうイメージが強いし、学校はプライベートじゃないので、あんまり見る機会はないのかなと。SNSでわざわざ学校の情報を調べない。
井指 正直その感覚は僕にもありますね。

加藤 なるほど。学務情報システムは普段からチェックしていますか？
井指 見ている人はちゃんと見ている気がします。僕は割と見る派ですね。 例えばインターンの募集や、宮城県美術館の企画展のお知らせ、課外・ボランティア活動支援センターの広報などが流れてくるので、一通りチェックしています。
加藤 じゃあ図書館からのお知らせは、学務情報システムも活用した方が良いんですね。
髙橋 あと学務情報システムはメールにも通知が来るので、単純に情報に触れる機会が2倍になると思います。普段学務情報システムにあまりログインしない人でも、メールの件名だけ追う人は多いと思います。
井指 ただ、なんで学務情報システムを見るかって言われたら、多分情報が集約されてるからだと思うんですよね。今は一日3件くらいなので見るんですけど、それが一日10件とかになると、どんどん流れていっちゃうので見るのが億劫になる。そういう意味では匙加減が難しいかなと思いますね。
加藤 本当にお知らせしたい情報のみ、掲載した方がいいってことですね。
井指 SNSと言えば、図書館長がすごいですよね。東北大生内でもフォローしてる人は結構いると思います。東北大生の間ではインフルエンサーですね。
田名部 なんというか人単位なんですね、今の学生の情報の調べ方って。キーワードで検索するよりも、人をフォローしておいて、その人が投稿した内容をチェックする。
井指 かもしれないですね。そういうのが多くなってる。YouTube、Twitter、Facebook、Instagram、全部そんな感じです。
加藤 この人の話は面白いから、この人なら信用できるから、みたいな。
井指 その次のステップがハッシュタグなのかなって思います。例えば、テレビで見たものについて知りたいからハッシュタグを調べるとか。何かしらがあって、ハッシュタグなのかな。
田名部 ハッシュタグは二次的な検索方法なんですね。

図書館をもっと使いたくなる仕組み

井指 僕らがもっと図書館を使いたくなる仕組みを考えると、図書館って喋らないのが当たり前だけど、やっぱりそれだとレポートとか根詰めすぎることもあると思うんで、農学分館みたいに話せる空間があるといいかな。結構広いスペースが必要なので、大変かもしれないんですけど。でも本がデジタル化されるにつれて、図書館はそういうある種コミュニケーションの場になるといいのかなと思ったり
しますね。
加藤 だんだん資料の電子化が進んで、今後は場所としての図書館が重視されていくのかもしれないですね。

田名部 滞在型・体験型っていうのが最近の図書館のトレンドですよね。 例えば、石川県立図書館が最近リニューアルしたんですけど、あそこはコミュニケーションが取れるスペースもあるし、モノづくり体験スペースといって3Dプリンターとかが使える場所もある。
学生一同 へーすごい、研究室みたい。

田名部 あとは、武蔵野プレイスっていう図書館があるんですけど、地下2階に青少年支援スペースがあって、コミュニケーションが取れるように、ボードゲームの貸し出しをしてたり、上の階には市民活動団体の支援施設が入っていたりする。図書館はこれまで、とにかく情報を貸し出す場所だったから、誰かが考えたこととか、誰かがやってきたことを文書としてまとめた本というものを、誰かに貸し出して情報を与える場所だった。今は本人に体験してもらうという場所にシフトしてきて、結構面白い動きだなと。今だいぶ大きな転換点にいるんじゃないかって思ってて。未来の図書館という観点から言うと、これまで情報を提供する場所だったのが、今本人が経験する場所になってきて、最終的にどこに行くんだろうって考えたら、今度はその一度限りの体験みたいなのを保存する場所になるんじゃないかって考えてます。例えば、演劇は一度限りの体験ですよね。映画館で映画を見ながら誰か一人が笑っても映画の内容が変わるわけじゃない。でも小さい劇場の演劇で、お客さんを笑わせようとして一人しか笑わなかったときに、演者が振り返ってありがとうって言う。そういうフレキシブルなコミュニケーションを取る場所、演者と観客で作る場所みたいな感覚がある。これをどうやってアーカイブしていくのかっていうのは、演劇界でも言われていることらしいんですよね。例えそれを映像に残したところで、ありがとうって言われた人の体験を保存できるわけじゃない。カメラの映像でしかないし、カメラが複数あったとしてもそれは複数の視点であって、体験のアーカイブではないだろうみたいな。VRとかメタバースとかが今増えてるので、そういう技術が発展していったら、今度はその一度限りの体験みたいなのを保存する場所になるんじゃないかって。大学としてどういうことをやるのかわかりませんが、そういう進化をしていったら、ちょっと面白いなって。
阿部 そういう場合、図書館が保存する体験って、何になるんでしょうね。
田名部 読書の体験ですかね。文字情報の余白を想像して、それぞれが体験する出来事とか。何を保存するかはわからないです。昔と今の線を引いて、その延長線上の未来を考えると、そんな感じなのかなと。
髙橋 あとは何か東北について発信できる機会や、東北のことがわかるような体験ができる場所になったら、面白いかな。学生にも自分たちの学びを発信したいっていうニーズがあるんですよね。例えば、今福島でボランティアをしてるんですけど、東北地方の魅力発信という側面からも、みんなで東北のことがわかるような体験ができる場所になったら、面白いのかなって考えました。
田名部 話を聞いていて、図書館で出会いとか刺激を受けるとか、乱数としての図書館になっていくといいのかなって思いました。書架の横に置いてある本、あれも乱数ですよね。
井指 確かに、その乱数って考え方は、僕もすごく感じますね。専門性を突き詰めていっちゃうのが大学のいいところでもあり悪いところでもあるかなと思うので、例えば普段自分が研究室で何かやってるだけでは得られないような情報がやって来ると、それに対しての興味が湧いたり、巡り巡って研究に繋がることもあるだろうし、その先には実用化にも発展するのかなって思いますね。

阿部 図書館という場があって、そこに関わる人自体が乱数になる。図書館の中にいる人と話すとか話さないとか、そういったことは抜きにしても、図書館に行けば誰かがいて何かをしてるっていうのは、結構大事な要素ではないかと思っていて。「ラーニングコモンズは公園」って話が出ましたけど、そういう機能があるといいなと。どうせ家の中にいても情報が手に入る時代なんだったら、人がいるところで何ができるかっていうのは、大事になるんじゃないかな。

目指す図書館像

加藤 「○○な図書館」みたいな感じで、一言で表現するとどうなりますか？
田名部 私はさっき言った「乱数としての図書館」ですかね。例えば、京都大学の京大100人論文っていう展示企画で、こういう研究やってます、みたいなパネルを並べて、それに対して参加者が「こういうことも面白いと思います」みたいなコメントを付箋で貼っていくっていうイベントがあった。これすごく面白いので、図書館でやるとしたらどうかなって。常駐だとだんだん目立たなくなって昔の掲示板みたいになっちゃうかなと思ったんですけど、でもそういう出会いとか刺激を受けることで、自分の頭の外に出られる場所に図書館がなっていくと、面白いかな。

井指 僕は「コミュニケーションの場」であってほしい。体験の共有もそうですし、それぞれの本についての思いの共有もそうですし、それを相互に話せる場というか、話さなくてもお互い干渉し合う場であってほしいなと思います。それは例えば学生間だったり、学生と教授だったり、図書館員と学生だったりすると思うんですけど、そういういろんな立場の人たちの相互のやり取りとか、コミュニケーションの場であってほしいなと思ってます。
加藤 私は「身近な図書館」であってほしい。図書館ってなんとなく近寄りづらいなとか、職員に声かけづらいなとか、敷居高いな

って思ってる学生さん、特に1、2年の学生さんは、そうやって図書館を遠巻きに見ている方も少なからずいるんじゃないかと思っているので、図書館をよく利用されている方にとってはもっと身近に、そうじゃない図書館を自分とは遠い存在だと感じている人にも、図書館って怖くないんだ、堅苦しくないんだ、もっと気軽に使っていいんだってことをまずは知ってもらって、徐々にでも身近なものになってほしいな、そして図書館を使い倒してほしいなと思ってます。コミュニケーションの場や乱数としての図書館という観点からも、同じような考えの人だけで集まるよりも、いろんなタイプの人が集まった方が、新たな刺激やアイデアが生まれやすいと思いました。

田名部 言ってみればサブスクですからね、大学図書館って。使わないともったいない。大学入る前は図書館って使ってました？

髙橋 僕は、高校時代は全然本を読まない人間だったんですが、実は大学を選ぶときに自分の選択の中の軸としてこの図書館があって。高校1年生の時にここの図書館を見学して、めちゃくちゃ大きいなっていうのが第一印象だったのと、蔵書の数が日本有数ってこともあって、こんな場所で勉強できたら最高だなって。なので、巡り巡って、今こういう体験をしてるのが嬉しいですね。

田名部 その場所で今、対談してますよ。

加藤 すごく良いエピソードですね。

阿部 目指す図書館ということでいうと、私は「居場所としての図書館」であってほしい。本を読まなくてもいい、自分にとって大事で過ごしやすい、懐の深い場所であってほしいなって思いますね。図書館にある本だけが大事なんじゃなくて、来る人自体がそもそも大事なものというか。

加藤 ただ本を保存しとくだけだったら、別に倉庫でもなんでもいいんですよね。

阿部 人間にとって、居心地のいい場所、開かれた場所であってほしいです。

髙橋 僕は「人との出会いがある場所」っていう、本にとらわれなくていいのかなって思ったのと、あとは皆さんの話を聞いてて、「心の拠り所になる場所」にもなったらいいなって。“人との出会い”っていうのは、本って文脈からそう思ったんです。本からもらった言葉や感動とか経験って、多分一生の財産になるって思ってて。最近出会ったフレーズで、「優しさは分けても減らない、そういう形のないものってお裾分けしても減らないからいいことなんじゃない」っていうのがあって。僕たちはNPOをなので、ボランティアとか、ボランタリティっていう言葉が結構必要なんですが、じゃあどうやってそれを証明していくかってときにこの言葉に出会って、すごく心にしっくりきた。だから、そういう言葉とか感動が、学生時代に一つでも得られたっていうのはいいことだし、それが図書館っていう場所でも何かしらできたら幸せだなって。もし人と人とが連鎖していったら、すごい素敵な場所になるんじゃないかな。図書館もいろんな文脈でここに居たいっていう場所になったら、体験って意味でも素敵だなって。

加藤 皆さん図らずして同じようなところに行きつきましたね。

髙橋 聞いてて、「すごい！　同じ感度だった！」って思いました（笑）

田名部 ゴール決めてなかったんですよね？

加藤 全然決めてなかったですね。皆さんどんな考えで何を話してもらえるのか全く分からない状態で、どうなるのかなと思ってスタートしたんですけど、感動しました。皆さん、目指すところというか、こうなってほしいという想いは一緒なんですね。

田名部 話を聞いていて、「本は待ってくれる」っていう言葉を思い出しました。いつ読んだ本でも読んだ時の体験は自分の中に残るし、その時はわからなかったとことでも、後から気づくこともあるから、いつ出会ってもいいみたいな意味だと思うんですけど、いい言葉だなって。

阿部 ランガナタンの「図書館学の五法則」の中に「いずれの人にもすべて、その人の本を」っていうのと、対になって「いずれの本にもすべて、その読者を」っていう言葉があるのが、私はすごく好きで。その時代に書かれて、その時代に読まれなくても、巡り巡って後から読んでくれた人が、おぉって思うかもしれないし、読んだことを忘れたとしても、バタフライ効果的にどこかその人の生活の中で変化をきたして、巡り巡って新しい発見になったり、その人の中でちょっと明るい出来事に繋がったりするってことがあると信じているので、そういう巡り合わせがある場所になっていくといいなと思います。

加藤 本も巡り合わせですし、人と人とも巡り合わせですしね。

田名部 人間よりも長く生きますからね、本は。

阿部 それこそ、そういう体験をアーカイブできると、何年も前の体験を未来の人が、おぉって見てくれるかもしれないですよね。

田名部 昔の写真を色々な技術でカラーにしたものとか見ると、結構衝撃受けますよね。昔の人たちってなんとなくモノクロで生きてたようなイメージになりがちですけど、実際にはカラーで生活してたわけだし。解像度が上がる感じ。残すって大事だなって思いますね。

加藤 図書館として長年本を残してきて、今、東北大学附属図書館も111周年ですしね。これから10年、50年、100年先も、図書館として情報を保存しつつ、人と人とのコミュニケーションの場としても発展していけると良いですね。それでは皆さん、本日はご参加いただき本当にありがとうございました。

Twitter @hagi_no_suke
Instagram tohoku_univ_lib
東北大学附属図書館 イメージキャラクター『はぎのすけ』

KIBOKO 木這子 ISSN 0385-7506 Bulletin of the Tohoku University Library (通巻168号) Vol.47, No.2 suppl.
編集・発行 東北大学附属図書館報「木這子」第47巻第2号 別冊
[発行日] 令和4年10月1日 [発行] 東北大学附属図書館
[発行人] 小陳左和子（広報委員会委員長）

東北大学附属図書館
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
TEL:022-795-5911 FAX:022-795-5909